

# 「俗」へのまなざし

渡辺  
優

WATANABE  
Yu

東京大学に着任して二年目となる昨年、主として教養学部の一、二年生を対象に、「宗教学入門」と題する講義を担当した。どの講義でも話の「つかみ」には毎度頭を悩ませるが、入門講義となればなおさらである。まずはできるだけ身近な話題からと、あれこれ考えた末、「日本人の宗教は多神教的であり、ゆえに寛容である」というステレオタイプを解体してみせることから始めることにした。

初回にアンケートをとり、この主張の是非について、受講生に自由に考えを述べてもらった。その結果、「八百万の神々を信奉する日本に

は複数の異なった宗教伝統が平和に共存している」という典型的回答も混じっていたが、寄せられた回答のうち多くは、上記の主張には賛同できないと答えていた。もっとも、このような問いかけには素直にイエスと答えるべきではないだろうという警戒心が透けてみえるものも少なくなかった。一般命題として肯定することはできないが当てはまる部分もある、という意見も目についた。部分的なイエスという回答の数はむしろ、「日本人の宗教は多神教的であり、ゆえに寛容である」という言説が、日本社会に相当程度浸透している事実を窺わせた。

じっさい、西洋の一神教の「排他性」と日本の「多神教」の寛容性を対比させ、後者の優越を説く言説は、砂漠的風土とモンスーンの風土における人間の思考の性質が根本的に異なりうることを説いた和辻哲郎の『風土』（一九三五年）以来、繰り返されてきた。とりわけ一九九〇年代以降、梅原猛や山折哲雄といった「靈性的知識人」（島菌進）を中心に、一神教⇨排他的・暴力的／多神教⇨寛容という単純な二項対立にのつとる言明が繰り返され、ひとつの言い回しとして定着してしまった感がある。ベストセラーとなった養老孟司の『バカの壁』（新潮新

書、二〇〇三年)にも同様の言説が覗く。

より最近では、二〇一四年九月に臨済宗僧侶の松山太耕が行なったスピーチ (TEDxKyoto) が、「クリスマスと正月が同居する日本」の「寛容な宗教観」を訴えるものとして話題を呼んだ (YouTubeで視聴可能)。さらには、「京大総長・山極壽一67歳がフランスで感じた「一宗教ゆえの欧米社会の行き詰まり」とは」(『文藝春秋』二〇二〇年二月号)なる記事など、枚挙にいとまがない。

「この国は沼地だ。やがてお前にもわかるだろうな。この国は考えていたより、もっと恐ろしい沼地だった。どんな苗もその沼地に植えられれば、根が腐りはじめる。葉が黄ばみ枯れていく。我々はこの沼地に基督教という苗を植えてしまった」。遠藤周作の『沈黙』に登場する「転び伴天連」の沢野忠庵こと、フェレイラの言葉である。むしろこれはフィクションではあるが、「日本の宗教は多神教的であるがゆえに他者に寛容である」という言説に冷や水を浴びせる強烈な批判だ。講義では、最初のパンチとしてフェレイラのこの言葉を引きつつ、日本⇨多神教⇨寛容言説に対して、およそ以下のように反駁を加えた。

まず、「クリスマスと正月が同居する日本」について。この主張には、学生のあいだにもはじ

めから明確な疑義を呈するものが少なくなかったが、要するにクリスマスや正月を「宗教行事」と意識しながら祝っている日本人がどれほどいるか、ということである。多くの日本人はそれらをたんなる「イベント」として消費しているにすぎない。だとすれば、「クリスマスと正月の同居」は宗教的寛容さとはなんの関係もない。それはむしろ宗教への無理解に裏打ちされた「節操のなさ」として批判されるべき事態ではないのか。

これと並行して、日本的多神教は、他者の信仰を蔑ろにする傾向があるのではないか、と指摘することができる。そもそも、「宗教的寛容」や「宗教的自由」という観念は、一宗教文化圏である西洋世界に起源をもつ。個々の信仰の重みを知るからこそ、宗教上の差異を互いに尊重しあう姿勢も生まれる。翻って日本はどうか。寛容といわれる日本社会にあって、自覚的信仰をもつ者は、むしろ肩身が狭いというのが実情ではないか。現に、日本社会において、宗教を信仰する者に対して負の感情をもつ者の割合は、世界的にみてもかなり高いという「不都合な真実」を示すデータがある(詳しくは、堀江宗正「日本人は他宗教に寛容なのか?」『いま宗教に向きあう1 現代日本の宗教事情』岩波書店、二〇一八年を参照)。ある論者の言葉を借りれば、結局のところ「日本人は宗教をなめて

いる」のかもしれない。

さらに、「日本人は多神教的であるがゆえに他者に寛容である」という言説は、それ自体が他者に非寛容でありうる。というのも、この言説はしばしば「一宗教は排他的だ」という、根拠を欠いた他者批判と表裏をなすからだ。一宗教⇨排他的/多神教⇨寛容という言説は、結局のところ、西洋文明という他者に対する日本の優越をいうための図式として作用している。一神教的な「AかBか」という二項対立の思考ではなく、「AもBも」包括するのが多神教のよさなのだというのも、よくあるパターンだ。が、「AかBか」という思考を一神教的であると決めつけ、決めつけることで多神教的な自己の優位を主張することそれ自体、典型的に二項対立的な思考を体現している。

如上の反駁の結果、はじめは「多神教の日本人は宗教的に寛容である」という言説を是としていた学生からも、当初の認識の浅さを反省したという感想が得られた。また、そこに「日本アゲのための言説」を察知して「いやな感じ」を抱きながらも、加えるべき批判を言語化できずにもやもやしていたが、講義を聴いて「すっきりした」という感想も複数寄せられた。

さて、以上のような話をするのは、担当講義を自画自賛するためではない。もぐら叩きのも

ぐらのように定期的に頭をもたげる「日本アゲのための言説」に対して、学生（そして本誌の読者）に免疫をつけてもらうことは、宗教学者がいちいち嘆息する機会を減らすためという以上に、大事なことではあるけれども。問題はむしろここからである。

ある受講生が講義後に次のような感想を送ってくれた。寺社仏閣や、近年ではパワースポットを訪れる人の多さをもって「日本人は実は宗教的なのだ」という主張には違和感を抱いてきた。講義を受け、そうした主張を反駁するための概念を獲得できた。一見、宗教的な空間が賑わっているようにみえても、多くの日本人にとって、神社や仏閣、聖地と呼ばれる場所は、実のところたんなる観光地にすぎない。そうであるなら、それは巡礼のような信仰的な行為というより、消費主義的ツーリズムというほうが適当である。宗教的というにはほど遠く、無節操な折衷主義的態度が認められるべきである。講義中に示された批判的視点をおのれのものとし、別の事象を的として自らの批判を展開してみせる、その意味では評価すべき感想であった。だがそれは、批判の歯切れのよさゆえ、かえって私を考え込ませることとなった。それはどこか危うさを感じさせたのである。この感覚は、ちょうどこの講義がはじまる直前、二〇二〇年九月に起こった事件を受けて考えさせられ

たこととシンクロして、私のなかで重たく鋭利なものとなった。

その事件とは、日本学術会議会員の任命拒否問題である。私が所属する大学や学会でも当事者となった会員——いづれもその道の第一人者である——が在籍しており、周囲も対応に迫られた。教員のみならず、学生のあいだからもさまざまな不安の声が上がった。情報を共有するとともに、今後の大学のありかた、そして学問と社会の関係性をめぐって意見交換を行う複数の機会が設けられた。

議論のなかで、次のような問題提起がなされた。そもそも、「学問と社会」、「大学と社会」という言いかたそのものもつ危うさに十分自覚的であるべきだ。学問と社会にしても、大学と社会にしても、けっして別物ではない。しかし、ここで用いられている格助詞「と」は、両者を結びつけるようにみえて、むしろ両者の断絶を前提し、自明視させる恐れがある。「アカデミア」や「学会」が、あたかも特殊な専門家たちによって構成される閉鎖的なサークルであり、一般市民の生活とは隔絶した場所であるかのようなイメージを誘発しかねない。

こうした訴えには私も強く頷かされた。そこで危惧されている学問と社会の断絶は、残念ながら、現実のものとして私たちの目の前に現れ

ていると思えたからである。

二〇二〇年九月に問題が表面化した直後、世論には、事のなりゆきについてあるべき説明を一切しようとしなさい（そしてその後もしていない）政府の無責任な姿勢への厳しい弾劾（びつ）はたしかにあった。だが他方、学術会議のありかたを疑問視する声も少なくなかった。SNS上では「学術会議は税金の無駄遣い」など、おおよそデマというべき論難が垂れ流された。あべこべにも学術会議を目の敵として、権力の側に立ち、学者や学問を「無駄」と叩く人びとが、この社会に一定数存在するという事実が突きつけられたのである。

かくしてこの嘆くべき問題は、学問と社会の関係について、改めて考えざるをえない契機となった。説明責任を果たさない政府に問題があるのは明白だ。だが、もし、現在の状況を招いた責任の一端が、学問のほうにもあるのだとしたら、今度の事件が、学問の言葉と人びとの日常の営みや感覚とが、どこかで乖離してしまっていることへの警鐘だとしたら――。

そんなことを考えながら講義をはじめたところ、先述の受講生の感想に接したというわけである。私がそこに感じた危うさとは何であったか。端的にいえばそれは、「普通の人びと」が織りなす、凡庸ながらも真摯な実践へのまなざし

の欠如である。

少し想像力をはたらかせてみよう。それがたとえ観光目的の寺社仏閣巡りであったとしても、その人が特段の自覚的信仰ももっていない「普通の日本人」だったとしても、神仏の前で「形だけ」でも手を合わせ、頭を垂れるとき、そこに切実な祈りがないと、誰が断言できるだろうか。病み苦しむ親しい者のため、あるいは見知らぬ誰かのため、つねに災厄と隣り合わせのこの世界のなかで、たとえその一時にとどまるとしても、人知れず祈りを捧げる者は、そこかしこにいるのではないか。そのとき、「無自覚な日本人の消費主義的な観光ツーリズム」という学問的な言説批判は、粗雑であるばかりか、暴力的ですらある。そしてその暴力性は、学問と社会のあいだに深い溝を穿つ恐れがある。

当然と言えば当然のことである。それをあえて言挙げするのは、いかにも頭でっかちな学者の自己批判だろうか。しかし、この種の陥穽に自覚的であることは、今日の学問にとつてますます大事なことであるように私には思われる。先の学生の回答は、私の講義をよく吸収した結果だとすれば、私自身も自分の学問のありかたを反省しなければなるまい。

時を同じくして、こうした思いをさらに強くするもうひとつの出来事に見舞われた。ただ

し、こちらは思いがけず嬉しい出来事として。それは、長らく絶版であったミシェル・ド・セルトリーの著『日常の実践のポイエティック』の文庫版解説を執筆する機会に恵まれたということである。

一九八〇年に出版されたこの本は、文化研究（カルチュラル・スタディーズ）の古典的名著として知られる。おのれのものならぬ場で、ありあわせのものを駆使しつつ「なんとかやっつけていく」芸芸が縦横無尽に論じられているが、それは無名の人、普通の人の日常のなかに潜んでいる芸芸である。何としないことのない日々の営みのうちに、密やかにしてダイナミックな創造的実践をみることに。セルトリーの試みは、近代の学知が見落とし、あるいは抑圧してきたものとの出会いなおしを図る、学知そのものの創造的実践ともいえるべき試みである。そしてそれは、専門家による学問と普通の人びとの生活のあいだにある齟齬を乗り越えようとする試みでもあったのだ。

本書を改めて繙くなか、訳者の山田登世子氏の次の一文に接して、私は文字通り膝を打った。「人文科学の成立以来、知の外部とされ、他者とされてきた日常文化、街の歩きかたにはじまって、毎日の無駄話から料理のしかた、暮らしの知恵、無意識にいたるまで、つまりはわたしたち名も無い大衆の日々の営み——学問は、

この「共通の場」に身を延べ、絶えずそこに立ち返ってこそ、ひとつの専門を超えてわたしたち普通の人びとを撃つ生きた力になる」。さらに山田氏はいう。「凡俗の俗、通俗の俗、訳者は語のすべての意味において「俗」なるものと無縁なものにいつさい興味をもつことができず、凡俗をゆさぶり動かす生きた知に魅了される者である」。

この「俗」へのまなざしの称揚には、いま学問がふたたび想起するべきものが示唆されているように思う。あえて宗教学に引きつけていえば、それは一見して「聖」なるものから遠い日常の暮らしのなかに、しかし、俗のなかにこそ瞬くような「聖」を探り当てるまなざしでもあるだろう。異形の宗教史家セルトリーのテクストが、学問領域の違いのみならず、専門家と一般読者の垣根を超えて放ち続けている魅力が証示するように、人びとのあいだにあって真に生きた学問の言葉は、そのようなまなざしとともにあるのではないかと思っている。この「俗へのまなざし」の希求は、学問が真に「凡俗をゆさぶり動かす」可能性の希求でもある。

（わたなべ ゆう・東京大学人文社会系研究科・宗教学  
宗教学准教授）

著書に、『ジャン・ジュゼフ・スチュラン——十七世紀フランス神  
秘主義の光芒』（慶応義塾大学出版会、二〇一六）など。